

### よみがえれ! 海岸林

# よみがえれ! 海岸林

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えます。

Vol.13

オイスカが宮城県名取市で目指したものは何か。一言で言うなら、早い段階から理念に掲げていた「国民運動型」のプロジェクトということになるだろう。地元を中心に幅広い人々の参加を促す—その理念のあらわれが、一つは育苗を担った「名取市海岸林再生の会」であり、もう一つ、大切なのが市民のボランティア活動ということになる。



慣れないツルハシで排水路を掘るボランティア (2018年6月)

植樹祭に参加した名取北高生 (2018年5月)

名取市に住む大槻壽夫さん (78/年齢は現在、以下同じ) は市の広報誌で知ったプロジェクトの報告会に顔を出したのをきっかけに、2014 (平成26) 年の植樹祭、そして定期的なボランティア活動に参加するようになった。今では定例の「ボランティアの日」のほか外国人の現場視察や学校の職業体験などの際の説明・指導役など「これやって、あれやって」と頼まれ、「年間40 (50日はプロジェクトにかかわっている)」。製菓・製パン機器の会社に勤めていた大槻さんは多趣味でもある。「百姓の子だから」植物相手はもともと得意で、早朝からの自宅や家庭菜園での庭いじり、土いじりも大好き。陶芸、能面彫り、書道、詩吟などしながら、「80歳までは」とボランティアに精を出す。

「苗を見てみると男だって可愛くなってくる。年配の女性にはよく「孫を育てるような気分になりますね」と言うよね。若い人も含めていろいろな人と話ができるだけでもありがたいことですよ。こっちの話は小言に聞こえちゃうかもれないけど」大槻さん同様、名取市の内陸部に住む松浦雅子さん (57) は、震災1ヵ月後の2011 (平成23) 年4月から7月にかけて、被災家屋などの片付けのため津波に飲みこまれた市内沿岸部の閉上でボランティア活動をした。「大それたことじゃなくて、時間もあつたし身体動かすと調子いいし」というが、自宅にも地震の被害はあつた。「被災した人がどうして？」と問われたという。閉上では、「作業している家でもらいものをしてはいけない」「震災当時の話をしてはいけない」と言い含められた。その後、名取とは別の地域の植樹イベントに参加すると、飲み物とお土産が出た。集中豪雨の被災地に軽トラックで行ったときは、ボランティア



植樹地で苗木の高さを測る大槻壽夫さん (2017年9月)

のリーダーに「軽トラは役に立つが女性には要らない」と言われたり、逆に「女性は目のつけどころが違って細かいところに気づく」と重宝がられたりした。そうした経験を経て名取の海岸林に通うようになったのは、作業自体の楽しさと、やはり出会いの魅力だという。「ただ黙々と作業しているわけではないですからね。知らない人たちと出会って時間を共有できる。行きやすいボランティアです。お土産どころか、一日働いたうえに寄付まで求められますけどね、ははは」と明るい。

は延べ1万1千人あまり。大きく分けると、企業や労働組合、学校など組織の参加と、個人の参加とがある。企業の社会的責任 (CSR) への関心が高まり、ボランティアを社員の役割の一環に位置づける会社も増えている。首都圏や関西も含め、数人から数十人規模で定期的に行っている企業・団体は30ほど。社員の間で新しい知り合いが増えて仕事もやりやすくなる、会社を超えたCSR担当同士のネットワークができる、といった声から参加者からあがる。企業のなかには震災前からオイスカとの付き合いがあつたところもあるし、震災の年の7月のシンポジウムをきっかけに関心を持ったケースもある。業績や予算によって活動が制約を受けるのは当然だが、復興のプロセスに長くかわれること、相手が生き物で変化・成長がみえること、適度な厳しさで充実感があることに加え、企業の担当者自身やそれを担う人々への信頼感がボランティアを会社の活動に組み込む理由になっていることがわかる。

## 人とつるむよりも一人の方が……

2019 (令和元) 年までにボランティアに参加した人は延べ1万1千人あまり。このうち、一人の方が……

一方、個人にもさまざまな人がいる。紹介した二人のよな地元の人だけではない。私自身が見慣れた顔だけ思い浮かべてもキリがないが、毎回未明に宇都宮を車で出て早朝到着し、電車でやってくるボランティアの送迎を買って出る人、東京から夜行バスで来て夜行バスで帰る人。千葉県から来てついでに温泉巡りをする人……。常連には一人で参加する人が多い。「誘ってもあまり乗ってくる人はいないし、人とつるむより自分の都合で動いた方が長続きするから」だという。

2回以上繰り返しやってくる人は参加者の4割だという。松浦さんの話にもあるように、いろいろなボランティア活動がある。見返りを求める人もいるし、「せめて飲み物ぐら

い用意してほしい」と思う人もいるだろう。きつすぎると、という感想もあるかもしれない。朝9時集合で昼食を挟んで夕刻まで肉休労働、というこの活動と違い、草取りや清掃などのボランティアでも、半日の2時間程度という活動はたくさんある。いろいろな経験のなかから向き・不向きはおのずから出てくる。そして、向かないと思った人は自然と来なくなる。

春から秋にかけて、ボランティアは現場でも草取りや排水路づくりを担当している。クロマツの成長には日光が必要で、放っておくと苗からんで全体を覆ってしまうツル性の植物、ツルマメやクズを取り除く手入れが必要だ。草取りという庭の手入れのよ

うに雑草をきれいさっぱり取ることをイメージするが、ボランティアに参加すると、そんな必要はないと習う。マツの邪魔にならない草は取るだけ無駄なのである。ツル性の草は地面を這って遠くまで伸び、他の植物にからまるので、生えはじめの根っこを見つけたのが難しい。ただ、作業の意味は理解しや



ツルマメ取り。苗が見えないほど覆っている (2019年8月)

### ボランティアに継続参加している主な企業・団体リスト (順不同)

- 三菱UFJニコス株式会社 (東京)
- 株式会社ニコン (東京)
- 第一三共株式会社 (東京)
- マルエツ労働組合 (東京)
- 全国繊維化学食品流通サービス一般労働組合同盟 (UAゼンセン) (東京)
- 全国化学労働組合総連合 (化学総連) (東京)
- 全積水労働組合連合会 (東京)
- 仙台トヨペット株式会社 (宮城)
- 埼玉トヨペット株式会社 (埼玉)
- ユー・エス・ジェイ クルー アライアンス (大阪)
- ANAホールディングス株式会社 (東京)
- 住友化学株式会社・住友化学労働組合 (東京・大阪)
- サミット・レイバー・ユニオン (東京)
- IBEXエアラインズ株式会社 仙台事務所 (宮城)
- ホーチキ株式会社 (東京)
- 全国労務労働組合連合会 (労務労連) (東京)
- 凸版印刷労働組合 (東京)
- 東京海上日動火災保険株式会社 (東京)
- 同 仙台自動車営業部 (宮城)
- 東北電力労働組合 (宮城)
- 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合) (東京)
- 京セラ労働組合 (京都)
- 株式会社パシフィック (宮城)
- 株式会社柿崎組 (東京)
- 高島屋労働組合 (大阪)
- ANAグループ労働組合連合会 (東京)
- 矢崎エナジーシステム株式会社 仙台支店 (宮城)
- フィリップモリスジャパン合同会社 (東京)
- セコム工業株式会社 (宮城)



ボランティアの日に挨拶する松浦雅子さん (2016年6月)



すいし、コツもだんだんわかってくる。もう一つの排水路づくりについては、説明が必要かもしれない。

## 慣れなくても やった気になる

クロマツを植えるために盛り土をしたことはすでに書いた。地下水を相対的に下げた。地下水位を深く張るためである。しかし盛り土の性質が問題だった。工事を管理した林野庁は「土質に一定の物理的・化学的な基準」を設けたというが、被災地全体の盛り土のために短期間に莫大な土が要る。海岸部ではなく山から持ってきた土砂（山砂）が、結果として水はけの悪い場所を生む原因になった。クロマツは乾燥には耐えられてもジメジメが苦手である。



排水路づくりのため力を合わせて防風柵を移動(2019年7月)

山砂に粘土質が含まれると次第に硬くなって根の成長を妨げるといわれているが、硬さもさることながら、水はけの悪さがマツには難敵だった。名取でも一度雨が降ると水が引かず、池や湿地のようになる場所が出てきた。その苗は成長が極端に悪かったり生氣を失って枯れていたりした。

植えつけ前であれば、重機で掘り起こしたり溝を掘ったりすることもできる。しかし、植えつけのあとだとそうはいかない。それで排水路を人力で掘る「溝切り」という作業が、ボランティアに託されているのである。

現場は海沿いで風は心地いいが、夏は暑い。スコップや、ましてツルハシなど使い慣れた人はほとんどいない。土は硬いことが多い。排水路が効果をあげるためには幅と深さが必要だ。でも、ときには水が流れだす。しばらくすると、水が抜けた植栽地では苗の松葉がくすんだような黄色からみずみずしい緑にみみがえる……。重労働だが、やった気になる仕事でもある。

日本列島の松林で猛威を振るってきた。その被害を最小限に食い止めるために欠かせないのが早期発見、そのための「目」なのである。

普段から松林を見回って異変に気づく目。変色して枯れ始めたマツをいち早く見つける目。そうした目の存在が海岸林の健康を守ることにつながる。マツの幼木は松くい虫の被害を受けやすいといわれ、名取の海岸に植わっているのはほとんどが松くい虫に対して抵抗性のある苗でもある。しかし、油断はできない。苗は人の背丈ほどになれば被害を受け始めるし、「抵抗性」とは「被害を受けにくい」という意味にすぎないからだ。長期にわたって海岸林を見続ける目、それは「地元」「若者」が持っている。

## 若い人に教育が必要なように...

2016(平成28)年5月、海岸での3回目の植樹祭に、宮城県名取北高校(北高)の生徒29人がはじめて参加した。翌年は91人。生徒は定期的なボランティア活動にも自主的

現場を訪れるようになって、このプロジェクトのキーワードは「地元」「若者」だと思ふようになった。これから長く海岸林と付き合っていく人は地元の若い世代をおいていないからである。そういう話をオイスカの海岸林プロジェクト担当部長、吉田俊通さん(51)や大槻さんたちともしたのだが、地元の関心は当初、高いとはいえなかった。

理由はいくつもある。何より、地元そのものが被災地だったことがあげられる。海に近づきたくない人もいるし、被災者にとってボランティア活動より生活再建が大切なのは当然である。「一日仕事」は遠方から来る人のやりがいにはつながるが、地元の人々にとっては半日の方が参加しやすいという面もあったかもしれない。

オイスカがそれまで名取とは縁のなかったことも影響しているように思えた。地元はオイスカを知らず、逆にオイスカも地元をよく知らなかった。知り合いに町内会長がいたり学校長がいたり地場企業のトップがいたり、ということとをきっかけにボランティア



挽地裕之名取北高校校長

に来るようになった。先日、挽地裕之校長(59)から、北高は42年前の創立当初から地域社会と連携して役に立つ人材を育てるという理念を持ってきたと説明を受けた。部活動の奉仕活動部、ギター部などが近隣の老人健康施設を訪問するなど、地道に校風を養ってきたという。

「そうした地下水脈があって、生徒も抵抗なくボランティアに入っていくと思う。年代の違う人とのふれ合いには、学校で学べないことがたくさんある。その楽しさが口伝えに同級生や下級生に広まった」と挽地校長。そして続けた。「植物に手入れが必要だということ、教育と似ています。教育も『手入れ』ですよ。人も植物も、きちんと手入れをすればちゃんと育っていく。植林でいえば、植えることには目が行っても手入れはおろそかになりがちです。『だれかがしてくれる』『行政

## ボランティアの1日



朝の集会で作業の説明を受ける。企業からのボランティアはピブスをつけて参加(2017年6月)



休憩は防風柵に鈴なりになって(2019年7月)



最近ゴミが増え、ボランティアに面倒な仕事が増った(2019年3月)



使った靴を洗う。そこまでが作業のうちだ(2015年7月)



植栽地でみつかったヒバリの巣。生き物との出会いもボランティアの楽しみだ(2017年6月)



作業を終えた「参加者の一言」も恒例になっている(2019年8月)



昼食は思い思いに(2019年7月)



仕事が終わって。海(右)からの風が心地よい(2017年6月)



最後の最後に寄付集め(2019年4月)



排水路づくりをする名取北高野球部員。運動部員にとっても手ごたえのある作業だ(2019年3月)

☆この連載は加筆して本年11月に単行本になる予定です



公益財団法人 **オイスカ** 〒168-0063 東京都杉並区泉2-17-5  
 電話(03)3322-5161 電話(03)3324-7111  
 E-mail: kaiganrin@oisca.org

■海岸林再生プロジェクト ホームページ  
<http://www.oisca.org/kaiganrin/>  
 ブログは毎日更新中!

プロジェクトへのご支援・ご協力をお願いします!

- 郵便局から(お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください)  
 口座記号・番号.....00100-6-482316  
 加入者名.....海岸林再生募金
- 銀行から(お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください)  
 銀行名.....三菱UFJ銀行 永福町支店(支店番号347)  
 口座.....普通 0054080  
 名義.....公益財団法人オイスカ(コウエキサイダンハウジンオイスカ)